

（選外佳作）要旨

自然との交流の ための提言

吉田 徳夫

本道の開拓の歴史は、豊かな未開の自然資源を収奪するという、自然破壊のもとに進められた。そのため北海道の中には、こうした「自然の取りくずし」型の開発至上主義をゆるす風土がある。二十一世紀論が盛んであるが、当然のことながら、過去を反省し、新しい開発に対する考え方を持たなくてはならない。それは、人間と自然との生活共同、更に進めて運命共同体という哲理にささえられた官民一体の道民運動であるべきである。

こうしたことを考えるにあたって、それぞれの市町村は、ふるさとの自然について点検をする必要がある。過去、現在にわたってその地域の実態を正しく把握し「自然の戸籍簿」を作成する。これが地域の自然を考える基礎となるものである。この調査にあたっては、多くの民間ボランティアを活動に組みこみ、地元民が自然を考え、またその保全について考えていくことが大切である。行政は村づくりの理念を持ってこれに対応、指導していかなくてはならない。

学校での自然教育を積極的に促進するよう提言したい。次代の緑を守り育てようとする時、その次代を担う世代に自然について正しく教育しておかなくてはならない。人の生長にとって自然とのかかわりが、豊かな情操を養い安定した情緒を育てる等、さまざまな効用があるのも重要な点である。

自然保護とは、自然を保護できる人づくりであり、指導する側のレベルアップも必要である。この問題は単に教育サイドの課題ではなく国民的課題でとらえるべき事である。この自然教育の一つとして、今のマナー化した修学旅行をあらため、日没の美しさに感動するといった、自然からの「最も素朴な啓示」といった自然との交流を起点とした旅行が望まれる。こうした交流体験旅行は、学校内にとどまらず、社会教育、生涯教育という見地からも推し進められるべきである。

もう一つの提言として、すでに策定されている北海道発展計画の一項に「自然の調和と緑づくり」の一項を入れたい。人々が自然に接する機会は増々増大するであろう。そうなれば、自然と調和した施設も多数必要となろうし、新たに緑とふれあう場も創り出していかなくてはならない。この一つの例として、各市町村をむすぶ道路にそつて道路機能を保全する森林造成を含めた緑を造成した「ロードパーク」構想を実現したい。この緑の中で人々は自然とふれあい、またそれを郷土の文化遺産として育成継承していく事を期待する。

これらの提言が実現される中で、先頭にいつも青少年の姿を見ることができたなら、来るべき二十一世紀の展望はどんなに明るいことであろう。